

目次

巻頭言・大学という教育の場を経て

～社会教育と大学教育環境デザインの視点から～ ——— 1

■特集 2023年度卒業制作

———— 2-11

みんなで東京湾葛西沖を考える

～みなさんからの質問・アイデア～ パネラーの皆さんからの答え

———— 12-15

葛西海浜公園ラムサール条約登録地周辺の自然

「東なぎさクリーンアップと生きもの解説」に参加して ——— 16-17

日本デザイン学会第2支部および環境デザイン部会見学会

「URBAN FUNGUS 能作文徳＋常山未央：都市菌（としきのこ）

—複数種の網目としての建築」を観覧して ——— 18-19

藤本英子先生退官イベント「Reincarnation」に参加して ——— 20

報告「長谷高史デザインの系譜セレクト展」 ——— 21

臨時総会・幹事会報告 ——— 22-24

巻頭言

大学という教育の場を経て ～社会教育と大学教育環境デザインの視点から～

藤本英子（京都市立芸術大学名誉教授）

23年間大学教育に関わって

この3月無事23年間の大学教員生活を終えた。先輩方には教育が続けられる組織に移るなど、定年後も異なる立場で大学所属を続ける方も有られるが、私はいずれも選ばなかった。その理由の一つは、環境デザインの中でも私が専門とする「景観」という分野では、さまざまな総合力が求められると共に、「景観まちづくり」となると、さらに広い視点での技術や経験が求められるからである。大学自身も最近では、少子化による学生の減少も相まって、社会人に対する教育の場を開く傾向にあるので、大学という組織で私の専門性を生かした教育が無理なわけではないだろう、ただもっとストレートに、私が担ってきた社会での役割を継承してくれる後継者を育てたい、という思いが

強くあった。この思いから2年前に一般社団を立ち上げた、その目的の一つが、各地で景観アドバイザーなどを務めることのできる専門家を育てるところにある。

私は今、20以上の自治体で40以上の委員などを務めている。景観審議会の委員は専門のど真ん中だが、関連では都市計画審議会、環境影響評価委員会、大規模小売店舗等立地審議会、港湾審議会、そしてコンペの審査委員から賞の審査委員まで広がってくる。この専門である「景観」の委員を考えたとき、建築、土木、緑の専門家などが関わるが、いずれも私の専門性との違いを捉えたと「色彩の専門家である」「デザインのトレーニングをしている」という点であるが、特に景観の中でも屋外広告物分野での的確なアドバイスをを行うには、この分野が欠かせな

発行日＝令和6年7月31日

発行人＝

佐々木美貴 mikisans1@gmail.com

編集＝

上綱久美子 tandk@sepia.ocn.ne.jp

川合康央 kawai@bunkyo.ac.jp

小泉雅子 koizumim@tamabi.ac.jp

山内貴博 yamauchi-t@g.kyobi.ac.jp

◆日本デザイン学会環境デザイン部会事務局

〒605-0991 京都市東山区川端通七条上ル

京都美術工芸大学 工芸学部建築学科

山内研究室気付

TEL 075-525-1515 FAX 075-533-6033

Mail 平松早苗 jssd-ed_hira@mbr.nifty.com

い。しかし専門家が少なく、引き継ぎ者に会えずにいることが多い。

景観法が施行されてから全国の自治体で景観計画がつくられ、景観の審議会やアドバイザー制度が位置づけられたが、果たしてどれだけの自治体がそれを有効に活用できているのだろうか。初めてアドバイザー会議を立ち上げられる時にお手伝いすることもあるが、まだ主要都市周辺では大学での近い分野の専門家が見つかるが、地方では大変な状況が浮かんてくる。ここを担える専門家を育成したいと考えた。

これからが本格的な活動開始になるが、大学教育では果たせにくい社会教育分野とも言えるかもしれない。建築、土木の専門家や熱心な市民活動家のために、景観分野での社会貢献のスタートアップを支援する教育ができればと考える。

成熟社会とも言える日本では、これからも、環境デザイン部会の関わる分野の重要性がますます高まると考える。ここにかかわる皆さんと、社会での活動の場が広がることを願う。

2023年度卒業制作

今年もED部会の皆様に募集させていただいた卒業・修了制作が揃いました。
今年度は15校から19作品が集まりました。
いずれも時間をかけて丁寧に制作された力作です。
卒業生・修了生のみなさまのこれからのご活躍を期待しております。
ご協力いただいた部会員の皆様には、作品をご推薦いただき誠にありがとうございました。

(EDplace編集員一同)

EDplace

- * 大学名、学科名等の表記は、投稿いただいた原稿に基づきました。
また敬称略とさせていただきます。
- * 誌面スペースの都合で、文字原稿や図版原稿を調整させていただいている場合があります。
ご了承ください。

東京藝術大学 美術学部 デザイン科
近藤のか
「外環の下を通るとき」

近藤さんは何か「力」のようなものを
感ずる場所に興味を持ってずっと制作を
してきた学生です。その彼女が子供の頃
からとても気になっていた自身の家の近
く「外環・川口JCの下」を改めて
詳細に調査し、感じたことを自身の幼少
期のエピソードをベースに絵物語として
視覚化しています。表現としては巨大な
「漫画」になっていますが、その紙にはこ
の地の草を漉き込んだりといった操作を
加え、点描で絵を描いています。

ストーリーとしては幼少期、この場所
を通った時に感じたことは、遠い昔から
続くこの場所の時の流れに一瞬のうちに
触れたのではないかと、一瞬の内にこの場
所の膨大な時間を感じたのではないかと
いうことです。その体験をベースに、丹
念に制作された作品は、現実世界のカラ
ーの表現から精神世界の（モノクロ+緑）



の表現に入った上で、またカラーの現実
世界に戻るという十数枚の量の大きさサ
イズの絵による漫画という構成になっ
ています。彼女が子どもの頃の僅かの時間
で感じたことを、今の我々が僅かの時間
で見るわけですが、これにスピーカーか
らの音も相俟って、そのイメージにとて

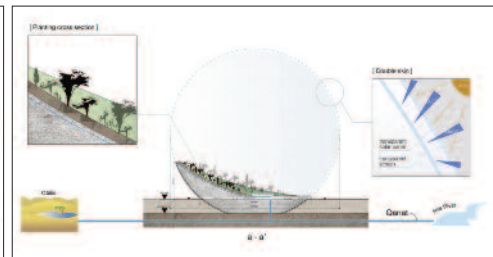
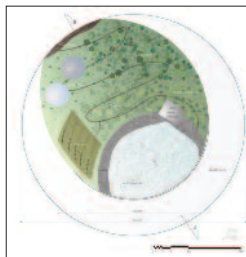
も共感出来る作品になりました。この作
品は環境デザインを考える上で重要な
「場所を読む」ことの意味や価値を伝える
秀逸な表現として高く評価され、東京藝
大デザイン科の買い上げ作品になったもの
です。
(推薦者：清水泰博)

女子美術大学 芸術学部
デザイン・工芸学科 環境デザイン専攻
高橋楓子
「THIS IS THE EARTH” PROJECT」

サハラ砂漠を対象地とした、地球の美しさを体感するツアープランニングと、ドーム型植物園の提案である。本提案は、環境問題への意識改革を目的としている。旅程は、カイロを出発し、砂漠やオアシスを巡り、植物園を訪れ、ナイル川を下り、カイロに戻る計画である。ツアーの核となるのが、広大な砂漠の中に計画さ

れた植物園のアースドームである。このドームは、砂漠緑化のための植物の育成や、食料となる植物の栽培などの研究を行う施設となっている。宇宙から見た地球の姿をドーム型スクリーンに映し、砂漠に置かれた地球のような外観の建築物とした。作者は、環境問題の中から、砂漠化による問題を取り上げて調査し、アースドームを食糧問題、貧困問題、自然災害への対策のための植物研究拠点と位置づけた。ドームの外壁は、施設内への電力供給のための透明太陽光パネルと、自然現象などを映し出す映像用透過スク

リーンによるダブルスキン構造とし、自然換気システムを構築した。砂漠における伝統的水利技術のカナートを用いて水を引き、本施設を貯水施設としても機能させる。自然災害時の水供給の拠点にもなる。また、その水は、植物園の植物群による蒸散作用と水蒸気の収集装置によって再利用され、施設内を循環する。このアースドームを他の乾燥地域にも設置していくことで、数々の拠点をツアーで結ぶネットワークが、地球を知り、守るプロジェクトとして展開できることも評価された。(推薦者：下田倫子)

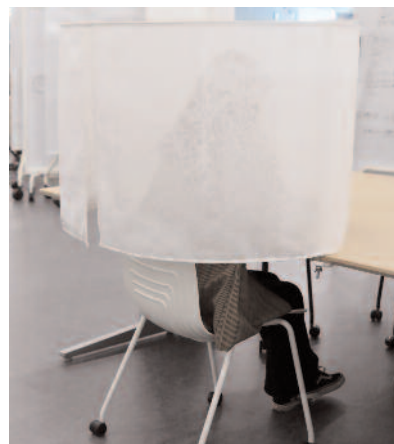


芝浦工業大学 デザイン工学科
生産・プロダクトデザイン系
山中実咲
「オープンラボにおける個室集中ブースの提案」

近年、オフィスや大学でのワークスペースは、フリーアドレス、リモートワーク、ABWなどが導入され、そのあり方が著しく変化した。芝浦工業大学デザイン工学部の新校舎の場合、オープンラボという共有ワークスペースができ、学生間のコミュニケーションの活性化、共同作業の効率化などの効果が進んだ。一方で、開放的なオープン空間のため周囲の目や騒音が気になり、個人ワークやzoomでの説明会などに集中できる環境が不足しているという問題があった。研究では、限られた空間に設置するという特徴から、オフィス製品に多い固定式のものではなく、可動かつ収納できるコンパクトなブースをデザインすることを目標とした。提案した試作品は、ワイヤーと布で作る



蚊帳のようなブースとなった。デザイン性と集中力について検証を行い、良い結果を得ることができた。既存のテーブル



や椅子を活用できる点も好評であった。
(推薦者：橋田規子)

筑波大学大学院 人間総合科学研究群
デザイン学学位プログラム 博士前期課程
張沢
「高齢者の視覚特性に配慮した避難所のサインデザイン」

本研究の目的は、高齢化率の高い地区の避難所に着目し、ユニバーサルデザインおよび高齢者の視覚特性を考慮して、避難所内のサインデザインを提案することである。そのため、つくば市筑波地区の避難所を対象地として定め、事例提案

を行った。

まず、避難所の機能スペースの分類と代表色を明確するために、高齢者と若年者のそれぞれを対象に実験を行った。実験の結果を参考にし、本研究の避難所のスペースの分類と各分類の代表色を提案し、避難所のサインシステムをデザインした。

制作内容は、壁面サイン、経路サイン、案内板、パンフレットの四種類のデザインであった。デザインにおいて、5つの分類別に異なる色を使い、直感的にスペー

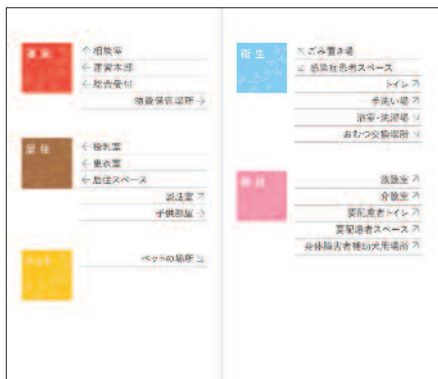
スを区別できるようにした。本制作で各分類に使用した色彩は、実験結果をもとに、高齢者の視覚特性に関する先行研究を参考にして提案した。また、本制作では、つくば市の市花であるホシザキユキノシタを図案化してサインの装飾に使用することによって余白の面積を減らし、サインを可愛らしく温かみのある印象に変化させた。これらのデザインが避難所利用者に親近感や安心感を与える効果を期待する。(推薦者：山本早里)



上：壁面サイン、21点（各220×350mm、一部）
左下：経路サイン、5点（幅各50mm） 右下：ホシザキユキノシタの図案



パンフレット、1点（210×297mm、上：表、下：裏）



案内板、2点（各480×841mm）

横浜美術大学 美術学部
美術・デザイン学科 プロダクトデザイン専攻
渡部駿貴
「Sprintivo」

『自身のモータースポーツ活動を振り返り、そこから卒制で伝えたいことをまとめる』渡部の2023年夏時点の卒業制作研究での理念である。砕いて言うと、モータースポーツの楽しさや奥深さ、限界値で車を操る楽しさ、自身の身体のように車を扱う喜びをレーシングカーとして

表現すること。外観は、戦後1950年代の自動車産業がモータースポーツを主軸に発展してきたことへのオマージュとして、クラシックかつ空気抵抗を軽減した戦闘機のようなボディスタイリング。その他のポイントとして、コックピットからの景色、人馬一体となり車と競い合う感覚、加速度、戦闘機に乗り込むようなミニマム感および身体の一部となるような包み込まれる感覚、そして小径ステアリング。以上のように、見た目（客観性）と居住性・操作性（主観性）の両面からのアプ

ローチで制作を進めた。

本大学は、4年次の前期から卒制に照準を当て研究・制作することができる。渡部は4年次前期から前述の理念、デザインコンセプトに基づき制作を進め、首尾一貫した冒頭の理念を表現し切った。自身が小学生の時からレーシングカーを操っているという経験から、表現したいことが明快で他者にも共感を得られるレーシングカーデザインとなった。文字通り「Sprintivo」（全力疾走）で成し遂げた作品と言える。(推薦者：上綱久美子)



左から
写真1 実寸大プロトタイプを試運転する
写真2 操縦背後のエンブレム
写真3 クラシカルなボディ

横浜美術大学 美術学部
美術・デザイン学科 ビジュアルコミュニケーションデザイン専攻
水野幸
「かな？」

普段生活している中で当たり前に目に見えている様々なサインや標識。屋外屋内問わず行きたい場所への誘導や注意、規制などその役割は多様だが言語で伝えているものも多い。

作者は様々な看板や標識においてそのものをそのものであると位置付ける要素

は文字よりもデザインや色ではないかと考え、制作に至った。アニメや漫画に出てくるその世界だけの独自の言語で描かれているものでもなぜかわかってしまうというところから着想を得たという。

リアルな世界においても違う言語の国であっても目的地へ誘導したり、注意や規制などのサインデザインは往々にして大きくは変わらない。禁止や制止は赤色、注意は黄色、トイレは男女のピクトグラムなど共通した色彩やデザインが多い。

加えて私たちは文字をどこで文字として認識しているのか、という点について

も疑問を持ち、文字をある程度の要素を残しながらもデタラメにすることで見え方がどのように変化するのか作品を通して作者自身も確かめることができた。

サインや標識は瞬間的に正しい情報が伝わるよう設計されている。まじまじと眺めて鑑賞するものではない。図や文字が一部可変されていてもなんとなく意味が伝わってしまうとしたら我々は一体何で認知しているのだろうか。様々な情報が日毎に加速化していく現在において根源的な問題定義を試みた作品となった。
(推薦者：田崎冬樹)



横浜美術大学 美術学部
美術・デザイン学科 テキスタイルデザイン専攻
金ヒョンジン
「緑」

この作品は、作者自身の中の緑に対する特別な記憶と自身の成長をテーマにした友禅染めによる作品である。タペストリー作品には家型の展開図があり、立体作品はこの展開図から出来た家である。作者にとって家は個人的な空間、自分の原点のイメージであり、記憶とつながる成長の記念物を象徴するものとした。タペストリーには流れた時間の記録として数字が描かれ、自分自身の背景の意味が込められている。いずれも記憶の中の多彩な緑が印象的である。作者が育った環境の中で、自身の目の奥にそして心の中に焼きついた緑の記憶である。友禅染めは日本の代表的な染色技法である。色が混ざらないように“糸目”と呼ばれる糊置防染の模様の輪郭線を丁寧に描いていく。そのゆっくりと流れる手作業の時間



の中で、作者は自身の過去の記憶と今の自分と向き合うことで、作品を記録として残しているのだ。表情豊かな曲線と緑の色彩には緊張感と開放感が混在している。タペストリーの中の家の展開図の唐突の抜け感が妙に心地良い。そこだけ切

り取られたような記憶の空白にも感じられる。家の内部では作者の世界観を感じながら、同時に外部の世界も考えることができる。鑑賞と体験によるプライベート心象風景を堪能できる作品である。
(推薦者：高瀬ゆり)

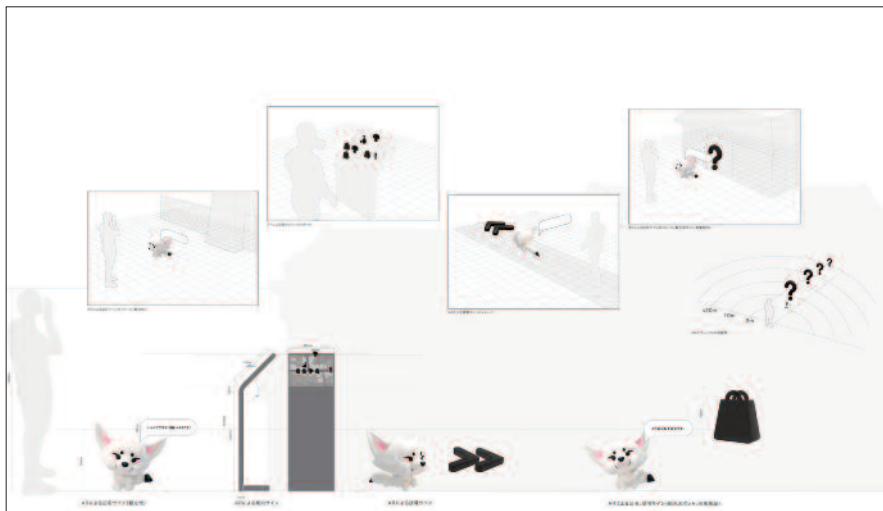
多摩美術大学大学院 美術研究科
デザイン専攻 グラフィックデザイン研究領域
吉星赫
「AR技術を用いた観光地のサインシステムの提案」

本研究では歴史的な町並みをもつ川越におけるARを用いたサインシステムの提案に取り組んだ。外国人観光客の増加、文化体験型観光への関心、老舗の筆文字看板が何屋かわからないなど、留学生ならではの問題意識があった。本サインシステムでは川越の白狐伝説から着想した小狐のマスコット「コハク」が観光客を先導し、多言語で案内誘導、説明する。合わせて、3Dアニメーションのピクトグラムを記名サインと地図に用い、店舗の

業種まで伝える。歴史的景観への影響に配慮し、ARを用いることでサイン本体の設置数を抑えた。インフォグラフィックスの研究を続け、ARサインへの展開、実

装まで取り組んだことを高く評価している。(推薦者：小泉雅子)

上段：サインシステム図
下段：ARでのコハクの案内と案内サイン



名古屋工業大学 工学部
社会工学科 建築・デザイン分野
岡本健汰
「百貨再編 - 減築を用いた祝祭の舞台への転換 -」

かつて人々の夢や憧れの象徴だった百貨店は衰退し、まちとの関係性を分断するような大きなボリュームが残るなか、消費の最大化とは異なる新たな百貨店のあり方が必要あると考える。

本提案では地方都市の百貨店に対し減築をおこなうことで、消費空間からまちの活動を受容する祝祭の舞台へと再編する。

敷地は三重県津市の松菱百貨店。津城を起点する城下町で、古くからの津市の中心地である。松菱百貨店は1963年から増改築を繰り返して今に至り、その大きな建物に対し日頃は閑散としている。

形態操作として、既存百貨店の機能を中央に縮小し、百貨店の均質な空間に対してまちと接続する軸を設定する。それにそって建物のファサード部分を減築、まちの要素から編集し、それぞれのプログラムを挿入する。

商店街からはアーケードの形態が連続する小さい空間が日常的な賑い演出し、都市的な動線からは文化活動の展示ギャ

ラリーが街に開かれ、河からのスケールアウトした舞台はまじりのレクチャーや演奏が行われ、郷土的な動線からは資料館をはじめとする学びの場が小さな舞台上におこる。津市の大きな祝祭である津まつりの日には百貨店自体を大きな舞台装置として機能し、まちの祝祭を取り込む。

このように、まちとの関係性を取り込みながら、祝祭を演出することで、津市の人々が百貨店に生きられる空間を取り戻す。

(推薦者：伊藤孝紀)



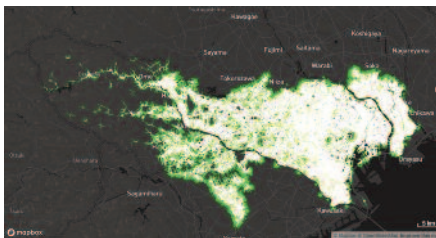
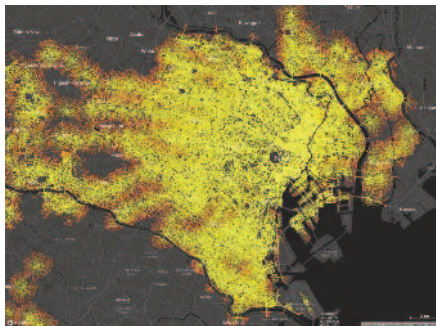
「WebGLを用いた大規模道路ネットワークの可視化」

本研究は、WebGL技術を用いた大規模GIS道路データ可視化に取り組んだものである。鉄道駅や学校、避難所などの公共施設へのアクセスは、住民の居住地選択や施設配置などの都市計画において重要な要素となっている。そこで本研究では、公共施設の到達範囲を示すため、実際の道路ネットワーク上の距離で計算し、WebGL技術を用いて大規模なデータの可視化を実現した。

都市圏規模の大規模データは、既存の地理情報システムソフトウェアでは処理に限界がある。そこで本研究では、WebGL技術を用いたブラウザベースのアプローチを採用し、GPUの計算能力を活用した地理データ分析ツールの開発を目指している。

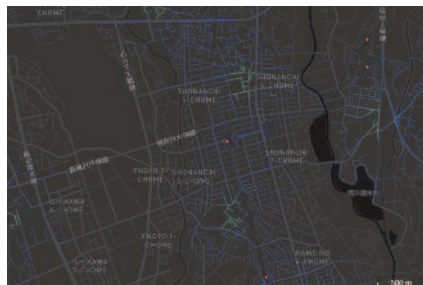
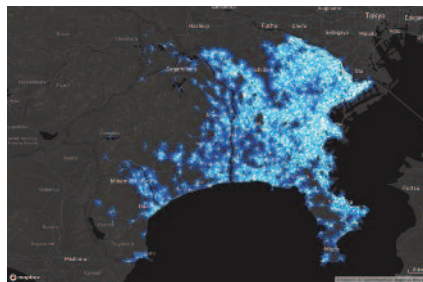
開発技術として、TypeScript、Vue.js、

Vite、Mapbox-glなど、様々なWeb技術を組み合わせ、データの取得から可視化までのシステムを実装している。特に、公共施設からの道路距離による到達範囲の計算には、最短経路アルゴリズムの実装にGraphhopper、地理座標計算ライブラリにviewport-mercator-projectなどが活用されている。



本研究は、都市計画や防災計画など、社会の様々な課題に対する有用なデータを提供可能である。また、WebGLを活用した大規模データの可視化は、逐次処理を行うことで軽量に動作するものとなっており、地理情報システムにおける新たな可能性を示している。

(推薦者：川合康央)



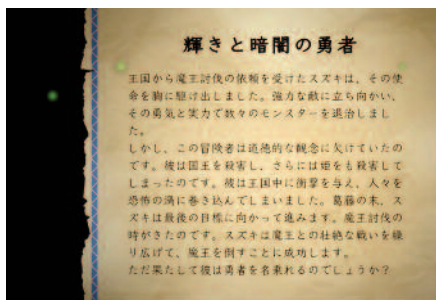
「大規模言語モデルを用いたRPG内のプレイヤー行動ログ作成」

本研究は、大規模言語モデルを活用して、ロールプレイングゲーム（RPG）におけるプレイヤー行動の要約と評価を行う、新たなログ作成手法を提案したものである。RPGでは、プレイヤーの行動や選択が、物語の展開などに大きく影響を与える。そのため、行動を評価しフィードバックすることが、ゲーム体験の質を高める上で重要である。

本研究は、プレイヤーの行動評価をテキスト形式で提供するものである。テキストによる評価は、これまでの数値による評価に比べ、RPGの世界観を崩すことなく、より深い物語への没入を可能とする。また、行動評価自体がゲームプレイに影響を与える要素としても機能し、プレイヤーに対して具体的なヒントやアドバイスを提供することもできる。

本システムは、まず、ゲームエンジンUnityを使用してRPGを実装し、その後、大規模言語モデルとしてOpenAIが提供するGPTを使用して行動ログを作成している。行動ログは、時系列に基づいて短い文章に圧縮するため、イベントに重要度パラメータを用いるなど、様々な技術的工夫を行っている。

これまでに、大規模言語モデルをRPG



に用いた事例は、NPC（ノンプレイヤーキャラクター）との会話などが中心であった。本研究による大規模言語モデルの活用は、今後のゲーム開発において広く応用される可能性とともに、現実世界での活動に対する行動評価などへの展開が考えられるものである。

(推薦者：川合康央)



秋田公立美術大学 美術学部
美術学科 景観デザイン専攻
伊多波七維
「おおだて屋台プロジェクト」

本プロジェクトは、作者によるインドネシア・ジャワの都市部で実施した「屋台」についての調査の成果である。作者は屋台のオーナーに交渉し、日々の都市内移動を追跡し、屋台（とオーナー）が販売時に現場で設定する仮設のテリトリーと、そこに生じる自律的で多様なコミュニケーションの姿を観察・分析した。

しかし、本プロジェクトは、単に調査成果の集積をもって「作品」とする一般的なりサーチ・ベイスド・アートの活動とは異なり、ジャワ都市で発見した情報を、日本の地方都市の再生のための具体的手法として提案するトランスローカルの社会実践プロジェクトとして提示されたものである。

本プロジェクトは、地方都市に生きる人々のコミュニケーションに内在する欠

損部分を探り修復することを目指している。この「欠損」部分とは個人の時間や記憶、物、情報、スキルやビジョンなどが自発的・偶発的に交わされる「日常の中でのインフォーマルな交換行為」であるとされる。作者は、その再生を担うべく屋台という移動体建築の運用を通して、地方都市の課題の本質に向けた様々な問いを発している。都市や社会に関わる様々な専門領域からの批評と協働可能性に対して開かれた、これからの建築教育・芸術教育が標榜すべき超領域性が社会実践として体现された作品である。

（推薦者：岸健太）



「屋台」で活動する作者



大館の商店街アーケードにて



展示会場風景（中央：作者）



様々なものが交換された「屋台」

福井工業大学
環境情報学部 デザイン学科
縫田陽和
「着せ替え道路 地域色で滞在できる道路に彩る」

現在、ウォークアブルなまちづくりが推進され、様々な取り組みや社会実験が行われている。ゾーン30もその取り組みの1つであるが、自家用車保有率が全国1位の

福井県ではまだ課題が多い。本制作では商店街が残る田原町を対象とした。モータリゼーションの進展による影響で、田原町のゾーン30に指定されている道路も車中心の空間になりつつある。滞在してもよい人に優しい道路を取り戻すため、WS形式のヒアリング調査で見つかった地域独自の色と、地域に溶け込む模様配置が成された新しい仕組みのボンエルフで車の速度を抑制させる。大きく分けて、地域独自の色を用いた民地側を彩るサブスクの仕組みと、季節ごとに行われるイベントで公道を彩る仕組みのデザインを計画した。サブスクでは、崩れた道路の破片や地域の商店街から出た野菜の廃材

などを使用して地域色チョークや地域色干し野菜シールなどに商品を作り替え、個人で道路を彩れる道具にする。イベントでは、田原町のタイル配置「延段」を参考にし、地域色である「深緑を基調とした茶色」、触れたいくなる色のトーンである「ブライトトーン」、ドライバーの注意を惹く配置である「奥行きある配置」を意識した地域独自のボンエルフを小中高生が季節に応じて作り替える。歩行者と車の境界を無くし、譲り合える生活道路を目指す。いずれ、道路の彩りが衰退しつつある商業施設や滞在空間を公道へと拡張、まちの賑わいや人の流れも着せ替える。（推薦者：三寺潤）



京都美術工芸大学
建築学部 建築学科
川瀬基子

「日常と非日常の間で～防災機能をもつ公園～」

日本は災害の多い国である。しかし「非日常の為に日常の空間を強化することは、必要でも一概に優先すべきではない」と感じた。そこで、日常の空間が多様な災害へ柔軟に対応できる「新しい時代」に求められる公園を提案する。敷地は、大阪府門真市の京阪古川橋駅南側にある中学校跡地とし、最寄りには門真運転免許試験場がある。古川橋駅は大阪や京都へのアクセスが良好で、大阪モノレールの延伸も決定しており利便性が向上すると思われるが、駅の南側は、昭和末期の土地区画整理事業で建設された大型ショッピングセンターや業務ビルが、衰退化しつつある。門真市には、高度経済成長期に急激な人口増加・流入の受皿として、京阪沿線に文化住宅等の木造賃貸住宅が、

短期間に大量建設され、その結果、狭い道路や老朽化した木造住宅が多く残っている。＜新しい時代に求められる公園＞を提案するために、地域振興、減災・防災、環境保護の三つの分野で効果が期待される「グリーンインフラ」という仕組みに着目して、災害時避難の中心



を担う公園を設計する。プランは本枝に見立てることで枝を道として、枝先に「グリーンインフラ」を配置している。各々の場所はある程度、閉鎖性を与えるように植栽計画を行い求心的に整えることで、利用する人々が集まりやすく落ち着ける空間とした。(推薦者：山内貴博)



崇城大学
芸術学部デザイン学科
和田莉乃亜
「まちならべ」

本研究のテーマは「子供の想像力と好奇心を高める玩具✕都市景観」である。世界には特徴的で魅力的な街並みが多く存在する。研究では瓦屋根の続く日本の伝統的街並みに加え、地中海様式、チューダー様式など、様々な街並みを構成する建物の特徴を抽出し、40mm角の積み木として再構成した。制作にはCNCルーターを使用し、ブナ材を窓や屋根の形状を単純化して造形した。また、切り出したパーツはレーザー加工機による彫刻と着色によって建築スタイルのディテールを表現した。およそ130個制作したパーツは元々のモチーフである調和の取れた街並みを構成することも、様式の入り混じった不調和の街並みを構成することもできる。玩具としては積み木の一パーツとして方向や向きをバラバラにして自由に

積み上げたり並べたりすることも可能であるが、研究の原点である街並みへの興味を伝えるために、各街並みの特徴をまとめた冊子に整理し、世界の景観を楽しむことができるように工夫した。



子供向けの玩具として研究を進めたが、精度の高い造形とパッケージとしての完成度の高さから、大人の鑑賞者にも高い評価を得た制作である。(推薦者：原田和典)



東北地方の赤べこや福井・鯖江のメガネなどの地域の産品は、発祥の歴史や製造の過程などで地域と関わりがある。しかし、その関わり方や結びつきは生活者にとって不明瞭である。そこで、本研究の目的を、産品と地域の関係性を分かりやすく伝えることとした。

まず、全国各地で産品と関わりがある地域に出向き、産品に関わる人や会社、活動などの現状を調査した。その結果、地域には産品を考え、作り、売り、使う



という様々な「関わり手」が見受けられた。地域性のある産品とは、地域に関わり手を持つ産品であると結論づけた。

これらを表現するために、産品の関わり手を巡る情報提供ツール「もののゆかり」を提案する。

まず、すごろくのように1本道になっているため、産品が生み出されてから使われるまでのプロセスを連続的にイメージできる。また、今回は福島・福井の各県の産品を3つずつ取り上げ、1枚のボードで一つの県をまとめて、関わり手たちが地域の中で面的に広がって存在すること

も表現している。各マスでは、県内の方言を使用したり、すべての産品が関わるイベントがあればマスを繋げて強調したりするなど、地域の個性を表している。また、各地の産品が共通して関わる重要な関わり手は立体的に表現し、イメージのしやすさとワクワク感を作り出している。

主に、産品を展示する施設や販売店舗での使用を想定しており、より有意義な購買行動への変容や、地域への関心や支援の増幅が期待される。

(推薦者：曾我部春香)

インテリアデザインにおいて受け入れられるスタイルの探求は重要なテーマである。本研究は、異なるインテリアスタイルの要素を組み合わせた「ミックス



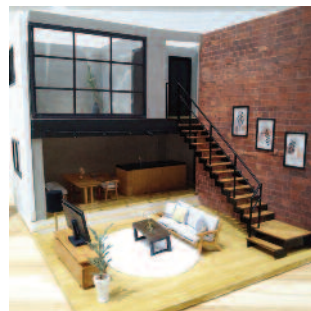
スタイル」の作り方のポイントを提示し、新たなミックススタイルを提案し普及を促すことを目的としている。

現状の代表的なインテリアスタイル48種類をピックアップし、横軸〈自然的〉⇔〈人工的〉、縦軸〈色やものの数が多い〉⇔〈色やものの数が少ない〉という2軸により整理した。そこで見られるミックススタイルを分析すると視覚的に占める面積およびアイテム数のどちらにおいても平均して各スタイルが“7:3”の割合になっていること等がみてとれた。

これらの知見をもとに、これまでになかった組み合わせとして、(1) 南欧 × 和風、(2) ミッドセンチュリー × モロッコ、

(3) フレンチカントリー × バリリゾート風、(4) ブルックリン × 北欧、(5) インダストリアル × 中国、(6) モダン × 中国、の6タイプのミックススタイルのインテリアデザインを作成した。

全国に住む15歳以上74歳以下の100名(男女比1:1)に単一スタイルおよび作成した6つのミックススタイルに対してアンケートによる意識調査をしたところ、ミックススタイルでは(1) 南欧 × 和風が一番好印象で、(4) ブルックリン × 北欧がそれにつぐ等の興味深い結果を得ることができた。インテリアの選択の幅が広がる意味でもミックススタイルの役割は大きく思われる。(推薦者：伊藤 真市)



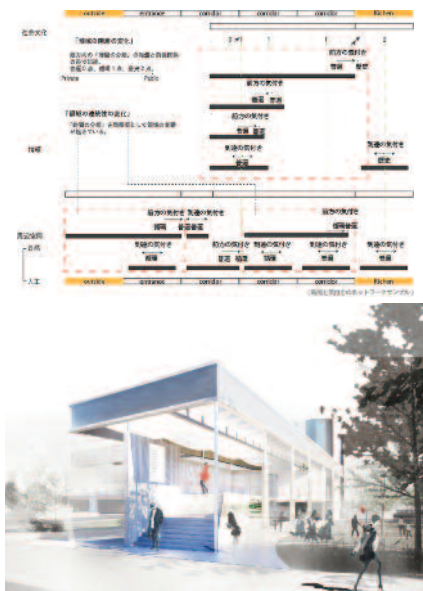
京都市立芸術大学大学院
美術研究科 修士課程
山崎丈
「The resilience of Limited extent
限定された範囲の回復力」

大学院での2年間、様々な社会PJを実践しながら過ごした山崎氏ならではの修了制作となった。提案の現場は奈良市庁舎前の広場である。現在フルフラットな市民広場として改修中の場所を、彼の理論に基づく装置を挿入することで、場の質を高めようとする試みである。彼の研究である「日常風景が生まれる場所が伝播していく周辺領域の創造」に基づき、「領域の階層の変化」と「領域の連続性の変化」をこの場の設計で生み出すことを目指した。

この広場は西に「多目的広場」東に「スポーツ広場」が計画されている。また正面の庁舎屋上にも広場があり、地上の2つの広場をつなぐ真中にホワイエと、その先の屋上広場への誘導空間を設計する

ことで、目的の異なる広場を緩やかに一体化していく領域を創出している。

このケーススタディとしての設計とともに、展示では、「気付き」と「時間」を切り口としたこれまでの調査報告と空間創出を行なった。スイスジュネーヴにあるCERN IdeaSquare で検証した内容も活



かしながら、大学の展示空間の中で、京都の街並みが見える場所を活用し、多くの絹糸を吊るした膜で作られた閉鎖空間を体験できる装置をつくり出し、実態感としても体験できる場を制作した。今後の研究の継続と発展を願っている。

(推薦者：藤本英子)



京都市立芸術大学
美術学部 デザイン科
大谷花
「―― ―・・・ ―――」

京都市立芸術大学は、2023年の10月に京都駅からすぐの駅前に校舎を全面移転した。今回紹介する二人は、この校舎で初めての作品展に参加することになる。これまでは京都市の美術館や、旧校舎での展示であったが、今回は、新しい新校舎で触発される空間のあらゆるところが、

展示空間として提供されることになった。大谷さんは一つの棟の3階にある吹き抜け空間に注目した。そこから触発されたのが「余白」という概念だった。

複雑な空間が設計で生み出されている大学建築は、あらゆる空間が学生たちを触発する。大谷さんも触発された一人だった。「曲がり角を曲がった先に、何が存在するのか想像することも空間の余白ではないか？」と捉えた。自身が感じる言語化できない心地よさを「余白」という言葉を当てはめて制作したという作品は、

見る者全てを魅了し、感覚的に心地よいと感じる空間が生み出されていた。

制作では日々、軽い布をひたすら縫い合わせながら作り上げていたが、大空間に吊るした時の空間想像力が求められる。吹き抜け空間に通る抜ける風に揺れ、まるで生き物のように浮遊する作品となり、見事にその試みが実現した。大学作品展に訪れる多くの人々が通り抜ける吹き抜け空間に存在するために、誰もが立ち止まる印象的な作品となっていた。

(推薦者：藤本英子)



みんなで東京湾葛西沖を考える ～みなさんからの質問・アイデア～ パネラーの皆さんからのお答え

佐々木美貴（江戸川区子ども未来館・愛知県立芸術大学／環境デザイン部会主査）

2023年6月23～24日の日本デザイン学会春季大会エキスカッション・オーガナイズドセッションにご参加いただいた方から、質問・提案・アイデアをいただきました。ここにその質疑応答などを掲載させていただきます。

質問にお答え頂いた、パネラーの皆様にお礼申し上げます。

質疑応答・提案

1. 質問

エキスカッションで葛西沖を船で見学。レンジャーの人が釣り客の残した釣り糸が足に絡まって足を切断してしまった鳥が多くいるとのこと。釣り客のマナーの取り締まりをするべき。看板を立てるとかしてはどうか？



【佐々木】釣り客の理解とマナーアップにいろんな対策をしていかななくてはならないと思います。

2. 質問

秋田県 八郎湖（旧八郎潟）の水と生きもののにぎわいを取り戻すために必要なハード、ソフトの両面の取り組みについて質問

農業用水池 カミソリ護岸 アオコ発生親水空間が無い 水辺が無い

【佐々木】現地をしっかりと見て、考えることが必要に思う。機会があり、八郎潟を訪ねた印象では、ボートで河川を利用しているところが一部見られたが、人の関われる場が少なく感じた。豊かな自然と農業の盛んな地を生かして、ボート場の近くに人々を巻き込みながら、自然

観察会や自然回復の実験を兼ねた人工護岸などを作るなどをできたら、自然回復への調査に関わりながら、長い目で水の生き物の賑わいを生み出せるのではないかな。

【高木】近くに生態系公園がありましたね。なかなか素敵な施設でした。（ザリガニ池はどうかと思いました）

あのような施設を拡張して八郎湖の環境保全と利活用に役立つNPOやマンパワーの育成を進めることはできないでしょうか？

【風呂田】生物群集は自然が形成した環境の多様性を巧みに利用して成立していますので、干拓前、元々あった地形や植生、塩分環境などを整理し、その環境の再生からどのような生物が回復させたいのかを考えてはいかがでしょうか。

3. 質問

（1）親水環境づくりにおいて安全性への配慮は何か工夫はあるのでしょうか？

防潮堤を緑で隠した時危険のエリアがわかりづらくなる？とか

この地帯は台風が主と思われますが、地震、津波などは考えなくて良い地域ですか？

【柿澤】元々私の主務は防災の専門です。低地帯である江戸川区の防災は「そこには駄目です」という、すごくインパクトのあるハザードマップなのですが、行政レベルでは防災のハード対策が決め手でありながら、それだけに委ねることはできない。やはり、その防災上の作法といったものを市民レベルにしっかり浸透させていくというのも一方で大事なことです。今のご質問の中では、ハード（対策）だけではなくソフト対策として、作法として自分自身でその状況に応じて判断して行動に移していく。その判断ができるような情報やそういった知識を行政側から出していく。その両側面が必要

だろうと思っています。

（2）今後は干潟の量をもっと増やす戦略が良いのか？

淡水・汽水のコントロールは、開発の仕方では生態系に良い様に上手くできるのか？

【高木】江戸川区の隣の市川市も三番瀬に干潟を造成すると先日発表したようですが、今後さまざまな議論が予想されます。

【風呂田】塩分は平常時の河川水量と滞留性で決まりますので、現況を理解して対応する必要があります。干潟は元々洪水時に河川からの土砂供給で形成されてきましたので、浚渫（しゅんせつ）などで良好な干潟底質材がでた場合には、適時干潟沖や汀線部に盛り土して自然に広がらせていくのがいいと思います。

【風呂田】補足になりますが、希少生物の多い小さな干潟が、実は埋め立て地の裏側によくできています。埋め立て地の裏側に水路が残っていると、そこに小さな干潟ができて生物が集まって来る。そういったところで新たな生態系ができています。全面に開けた海岸だと大きな砂干潟になる。また小さな干潟でもそこに合った生物の生息場を作り出す。その場所の特性にあった干潟の構造が大事だと思います。

（3）大都市の親水環境について
大都市部の親水型のエリアなので、地域の歩いて行ける方々だけのためにするか、都民のためにするか、あるいは大きく、観光の人たちへどのような方策を考えているのか？防災教育だけでは足りなくて、知らない人が来て、津波のような危険がある場合は、今後どう考えたら良いでしょうか？

【上山】今日、私たちは葛西海浜公園やウォーターフロントを含めて考えているのですが、市街地についても今まで水害対策をしっかりしながら整備がなされ、災害にも強くレクリエーションの場としても活用できるように考えられてきたのではないかと思います。これからは、今言われた防災と観光という2つの面を掛け合わせたかたちで景観をデザインしていくことが求められるのではないのでしょうか。



柿澤佳昭氏



上山肇氏



風呂田利夫氏



高木嘉雄氏



佐々木美貴氏

4. 質問

・海の生きものが見られるライブ動画提案

・浅草海苔造りをしたい！！提案
・まず知ることが大事そのための仕掛け作り(子どもだけではなく大人も観光客も)
・水上ツアー(昨日の屋形船の様に)提案

・柿澤さんが紹介してくれた冬場の魚取りを体験してみたい！(よしず ましず?)

・葛西沖を空から見る気球ツアー
・ドローンを飛ばしてライブ配信

【佐々木】たくさんの提案ありがとうございます。

【柿澤】・海苔つくりを含めた里海体験は、ネットで検索していただくといくつか活動団体がごいます。

例、認定NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会(furusato-tokyo.org)

・えどがわエコセンターへのお問い合わせもあります。認定NPO法人えどがわエコセンター(edogawa-ecocenter.jp)

【風呂田】野鳥園や海浜公園でも色々な観察会を行なっています。

【上山】市民が水辺に親しむための取り組みとしてどれも貴重なご提案だと思います。今後、市民協働や産学官等で考えていくことができれば良いと思います。

5. 質問・提案

(1) 生物の方の専門の視点からお話が伺えて、大変興味深いです。

元々の特性から、歴史、変遷、を経て、どの様に今日の姿に至るのか、関心を持ってもらうこと、知ってもらう試みも大切と感じます。

質問 その様なために、現在実施していることや今後したら良いとお考えのことがあれば、教えてください。

【風呂田】現場で活動されている団体がこ

れまで多くの観察データを持たれていると思います。それらの整理をされてみてはいかがでしょうか。

【柿澤】

里海の体験活動と座学「葛西の海の歴史」の定期イベントを葛西地区に限らず区内のいたるところでできると良いですね。

【上山】おっしゃるように今までの歴史的経緯を含め、現在行われている様々な取り組みを広く知ってもらえるような情報伝達の仕組みも考えていかなければならないと思います。

【佐々木】江戸川区子ども未来館では、葛西海浜公園で生物観察、ゴミ拾いとビーチコーミング、生きものマップ作りなどを子どもと保護者のためのプログラムとして行っています。他の団体は海苔づくりや海水浴体験、野鳥観察など一年を通じてさまざま展開しています。東なぎさでは、専門家による生物調査や年2回のクリーンアップ事業が認定NPOえどがわエコセンター主催で行われています。

かつて東京都が全国のラムサール登録地から子どもたちを集め、「KODOMOサミット」を計画したのですが、コロナ禍により中止したままになっています。いつかそのリベンジを期待しているところです。

(2) 提案 デザイン視点では変遷をARで伝えるetc、出来そうです。

【佐々木】今後できる予定の、葛西海浜公園のビジターセンターで最先端のARも使いつつ、リアルな生態系も学べる場所であると思います。

6. 質問

環境の保全と利活用のバランスをどうするのか?→生物モニタリングを行っているのか?対象種は? 観光モニタリング自然観察会、子ども カニ

他地域(三重県)では、海水温上昇によ

る生態変化があるが、ここはどうか?異なるスケールの環境変化がある。

【高木】いろいろなお考えがあるかと思いますが、葛西海浜公園では東なぎさを原則的に立ち入り禁止とし、西なぎさは時間内自由な利用が可能としているのはよく考えられた結果だと思います。東なぎさの貴重な自然環境についてより多くの方々に知っていただきたいのはもとよりですが、一方でここまで復元できた干潟の環境が損なわれないようにしていきたいですね。

生物モニタリングは東京都や江戸川区、えどがわエコセンターなどが定期的に行っております。鳥類、魚類、底生動物、植物など多様な分野をカバーしています。

【風呂田】継続的なモニタリングは不可欠です。これまでのデータを整理した上で、今後のモニタリング体制について議論と実施が大切だと思います。

生物モニタリングをやりたくて、今、体制を考えている。東京湾再生推進会議というのが内閣府のなかにあり、その関連組織として東京湾再生官民連携フォーラムがあり、そこで民間の参加する東京湾の生き物調査への協力を行政からお願いしている。しかし、どういう生物を対象にして行ったらいいのか、それを誰がチェックしとりまとめるかは人と予算が必要でなかなか決まらなくて。正直言って、行政だけでは動かない。私たちのほうでそれをサポートするかたちで、昨年から東京湾のすべての生物群の調査を、海浜公園などの指定管理者へのアンケート調査で進めている。そういう潜在的な能力はあるのですが、それをどうやって活用し、実際誰がデータ整理を含め運用するのか、というのは今大きな課題である。研究機関、例えば水産試験場だとか大学の研究室でできるのではと言われますが、そのような研究組織そのものがない状態。



オーガナイズドセッション会場風景

それから大学では、生態学的な研究室というのはほとんどありません。なにより生物分類をしている人がほとんど、今、絶滅危惧種状態で、はっきりいって、生き物の名前が分からない。根本的な問題を抱えていますけど、現在ある限られた人材をどう活用するかというのは、せめて行政的な支援を受けながら、関係機関が国などからお金をもらいながらやっていけるとありがたい。例えば、大阪湾について、ここは国交省から助成を受け生物調査をしている。そうしてやっぱり、具体的な労働といいますか、働ける体制があれば、まだ、可能性はあるのではないのでしょうか。

7. 質問

子どもを連れて訪れた場所に、時間をかけて今の生態が育っていること、過去の出来事を官民が一つになって変えてきた事は素晴らしい歴史を感じ、未来をも想像しやすくなりました。海辺、水辺を生かすための里山に手をかける様に、学び守る活動が大変重要であると感じました。その場の「らしさ」を深掘りして、その場らしさを根底にした活動や開発が望まれます。

逆に守るために他者が訪れ、知り、渡ることも重要です。人を呼ぶ活用してもらえる「しかけ」があるといいと思います。

【上山】「5」と同様に今までの歴史的経緯を含め、現在行われている様々な取り組みを知ってもらえるような情報伝達の仕組みも考え、広くアピールしていけると良いと思います。

【風呂田】親子連れの中で、幼児が自由に水遊び、生き物遊び、砂遊びができるのをサポートするために、海水浴場のような指導救急体制と、水浴や更衣室の設置、

ガイドによる観察支援窓口などがあるといいですね。

8. 質問

親水空間を楽しむ

地縁コミュニティや趣味縁コミュニティはどの様なものがあるのですか？その新旧は？

【佐々木】4で柿澤氏回答に加え、清掃活動、海水浴体験も地元江戸川区のNPOで行っています。

9. 質問

水辺から見る東京は新鮮に見える。もっと水路からのアクセスを活用すれば良いと感じた。江戸時代には水の都であったのに、残念な事である。

【佐々木】水を身近に感じる生活があればこそ、水質も気になり、一人一人が水に気を使うことで、水質も良くなっていくようになると思います。

10. 質問

立ち入り禁止の東なぎさに無人のカメラを設置して、臨海公園の生きものステーションやクリスタルビューなどに中継してはいかがでしょうか？

【上山】それも一つの有効な方法だと思います。録画により何か変化があったときには何らかの解説ができるといいですね。

【高木】よいお考えです。最近タヌキも複数頭棲みついているという情報もあり、今後の影響が気になるところです。「ダーウィンが来た！」に使える映像が期待できます。

【風呂田】9とも関係しますが、東なぎさは江戸前本来の景観が見られます。水路に橋をかけて東なぎさの展望台が欲しい

です。

11. 感想

消防法が厳しくなった事により、マンション外部に植栽・プランターなどが全く無いバルコニーが多くなりましたが、潤いがなく寂しい事です。極端なことを言うと、刑務所の様になってしまった。ぜひ、少しでも潤いのある風景になって欲しいものです。

緑が多い公園があつてほっとしました。とても楽しかった良い企画でした。ありがとうございました。

12. 提案

動物や環境に対して、やはりゴミ問題は深刻さを感じますネ。あるルール化、リテラシーの持ち様はとても大切な事になります。

風景や物語等、自然と人工の織りなすエリアはとても特徴的な魅力を持つ場と感じることができる良い時間となりました。ルールを作り、守ることで得られることを学びの一環としていきたいですね。

13. 提案

運河沿いの手すり（白からダークカラーに）

葛西海浜公園のアシ（ヨシ）で葦船を作って（みんなでワークショップ）海に浮かべましょう。

14. 質問

江戸川区の親水公園の水面のTPはプラスですか？マイナスですか？

【柿澤】

ご質問の意図がわかりませんが、区内での地盤高は概ねT.Pプラスです。

T.P=A.P+1.1344mと変換し、詳しくは東京都建設局河川部発行パンフレット「低地帯の地盤高平面図」でご確認ください。

15. 質問

葛西海浜公園の西なぎさ、東なぎさの砂は自然に流れ着いたものですか？

今、砂の流出はありますか？

【柿澤】

葛西沖の埋立て開発の際に人工的に復元

したものです。砂の流出が発生しないように何度も模型実験等を繰り返し、現在に至っています。

【佐々木】西なぎさに2023年10月に行った時には、

①なぎさ橋より西側の幅30mくらいで、砂の流出により、地盤のコンクリートと土が露出していました。その後、砂浜の保全工事を行い、今は元通りになっています。

②また、汚泥のような、ぬかるみが干潟に部分的に発生して、足を取られると抜けられなくなります。大雨時の污水处理場からの排出ではないかと里海エイドの橋爪さんと話しています。が真実は不明です。

①②両方とも、大きな台風の爪痕かと思えます。少々ですが、20年の気象の変化で、想定外のことも起きているようです。

【風呂田】周りに埋立地が伸びたことで、葛西海浜公園が閉鎖的な河口水域になりました。河口干潟には泥がたまりやすので、今後泥っぽくなっていくのが自然だと思います。

16. 提案

アイデア 水流と逆さ向きに回転するポールを設置しておく、釣り糸の回収ができるのでは無いかと思いました。



【佐々木】

何か回収できるものができると良いですが、他の生き物を巻き込まないようにしたいです。

17. 質問

芝浦工大船着場の深水はいくらくらいか？
何が釣れるか？ ハゼ、スズキ、コノシロ？
地盤沈下はしてませんか？

【柿澤】

地盤沈下については、東京都が複数個所で定点観測を続けておりますが、現在は地盤沈下していません。

18. 感想

レンジャーの木村さんの話とても楽しかったです。東京湾の自然に関わるいろいろな方のお話が聞きたいです。

(レンジャーさんにはどうしたらなるのかは、先ほどご本人にしちゃいました。)

19. 提案

釣り糸が野鳥の足を傷つけているのことは、とても悲しい。けしからん！釣り客に釣り糸や針を捨てると罰金にする法律を作るべき！

【風呂田】釣りは子供にとって捕獲行動として自然の生き物の生態を理解しようとする大切な行為だと思います。期間や区域を決めて子供たちが釣りをしたくなるような仕掛けが欲しいです。

20. 感想

清新町に住んでいた時に始まった公園整備が34年前だった。と言う話を聞いて感動するやら、びっくりするやらでした。いや一年を取るわけですね。懐かしいです。

21. 感想

I very impressed with environmental restoration efforts And convey the value to the next generation

環境再生の取り組みに感銘を受け、その価値を次世代に伝えていく

【佐々木】違う国の方にも共感いただき大変嬉しいです。1つの地球で考えていく、身近な環境保全が必要だと感じました。ありがとうございます。

【風呂田】 All natures should be the best teacher for children.

すべての自然が子供たちにとって最良の教師であるべきです。

22. 感想

Thank you for your organizing this seminar and for providing a platform to discuss the vital relationship between nature and urban environments.

I look for land to applying the knowledge gained to contribute positively to future environmental design in the land

このセミナーを企画していただき、自然

と都市環境の重要な関係について話し合う場を提供していただきありがとうございます。得た知識を活かして貢献できる土地を探します、未来の土地の環境デザインに前向きに。

【佐々木】このオーガナイズドセッションの意義を真摯に受け止めていただき大変嬉しい。

—

オーガナイズドセッションのアンケートから

アンケート回収8枚

アンケートの参加理由では、エキスカレーションに参加したからが多く、皆さん興味を持って会場に来てくれたようです。

O.Sの内容には満足、ほぼ満足をいただきました。また、

・とても面白く 興味深く 伺いました。もっと時間が欲しいところと時間の不足もご指摘がありました。

自由記載では、

・おもしろかったです。ライトでいいので提案が多く出せると良いですね

・パネリストの方々のそれぞれのご専門から、お話が聞けたのが良かったです。

今度は海浜公園に見学会に行きたくなりました。機会があれば是非お願いします。

・川との関係が重要なのではないではないか「森は海の友達」とどこかのキャッチフレーズですが、友達関係に役立っているのが「川」だと思います。葛西沖きは、荒川、江戸川があるからできたのだと思ってます。

・今回の企画はとても興味深く思っていて金曜は都合がつかず残念でしたが無理やりO.Sに参加しました。

・水辺が良いのはわかるが、これが苦勞してできたものだというのを分からせる必要がある。自然を大切に思う心を持たない人は、単にレジャーの場が増えたと思うだけでゴミを捨てたりする。釣り糸を捨てて鳥が足を失ったりしている。

以上のご意見がありました。

葛西海浜公園ラムサール条約登録地周辺の自然 「東なぎさクリーンアップと生きもの解説」に参加して

上網久美子 (design office kk 代表)



図1

●はじめに

晴れた2023年10月28日(土)の早朝、葛西臨海公園の東京水辺ライン発着場近くの広場に小学生くらいの子とその親が続々と集まってきた。ここから海を渡り目と鼻の先に西なぎさと東なぎさ(どちらも干潟)があり、両方を指して「都立葛西海浜公園」と呼称されるが、その日の親子連れの目的は、東なぎさへ船で渡ってゴミ拾いと生息する生き物の観察である(図1)。このイベントの主催はえどがわエコセンター、協力は江戸川区子ども未来館と指定管理者の「葛西海浜公園パートナーズ」。ファシリテーターは、環境デザイン部会主査でもある佐々木美貴氏。同年6月開催の日本デザイン学会春季研究大会のエクスカッションと本部会主催のオーガナイズセッション「葛西沖から〜」の関連として参加した。私は都市環境デザインの領域でデザイン計画・設計を専門として個人事業を行いつつ大学で教えているが、そういう視点からも取材報告をしたい。

●葛西海浜公園東なぎさ

葛西海浜公園東なぎさは、1989年同公園開園以来34年間、一般の人を立ち入り禁止にしている生物のサンクチュアリで人工的に復現された無人島。同公園および周辺の葛西沖は2018年ラムサール条約湿地に登録された。干潟には広大なヨシ

原が群生していて、トビハゼなどの魚類やカニの仲間の格好の住処となっている。またオオヨシキリやチュウヒなどヨシ原を好む野鳥が多く飛来し冬には約3万羽の渡り鳥が訪れるなど、自然豊かな環境を大都市の海辺で保っている。

このイベントは、江戸川区の子ども未来館せいぶつ部(以下、せいぶつ部)の10月プログラム行事として、子どもたちと保護者が東なぎさにたくさん漂着するゴミの清掃活動を行ない、生息する生き物観察を通して豊かな自然と保全について考える企画である。

●東なぎさでゴミ拾い

当日午前8:30集合で、受付を済ませ当日スケジュールや注意事項の説明があり、ストレッチして(船乗り降り、整地されていない場所でゴミ拾いや移動するの

で)、せいぶつ部の先生方より葛西海浜公園周辺の生物などについての簡単なレクチャーを受け、いざ東なぎさに向けて乗船。関係者入れて総勢40名ほどの東なぎさ上陸になり、渡し船2回に分けて2班構成で上陸・活動開始(写真1〜3)。

東なぎさのゴミ拾い、どこからどういうルートでゴミが漂着しているのかわからないが、実にさまざまなものがゴミとして集まる。私が参加した班はゴツゴツしたテトラポットが集積している場所でのゴミ拾い、テトラポットの隙間にゴミやいろいろな物体が落ちて(漂着して)いて、拾い上げるのに一苦勞。子どもたちははいつも軽やかにテトラポットの上を飛び回り、生き物の死骸を見つけては食い入るように見たり触ろうとしたり。生き物の死骸も含めてゴミと呼ばれるものからいろいろ考えさせられる。やはり問



左から

写真1/8時過ぎの葛西沖をみる



写真2/受付後レクチャーを受ける参加者



写真3/船で東なぎさに上陸



左から

写真4/ゴミ拾いの様子



写真5/鳥の死骸(骨)もゴミ? 写真6/分別した拾ったゴミ



題は、自然に分解されない材料や素材から成るゴミが海や川や山など自然環境に散乱してしまうことだと思う。それらから影響を直接受けるのが自然環境を生息地とする生き物たち、そしてその生き物を食したり、接触することで結局は人間の心身に影響する。うーん、どうしたら良いのか。まずはそういう現実を自分の五感を持って知ることが大事であるのだと思う。このゴミ拾いでどれだけの子どもたちが次のステップへ思考を進めたのだろうか (写真4～6)。

●水生動物や植物の観察会

ゴミ拾い終了後、スタッフが採集した東なぎさに生息している水生動物や植物などを種類ごとに講師が説明して見せてくれた。このイベントでの約束の一つに、東なぎさの生き物を採集しないことと持っ

て帰らないことがあった。生き物を見るだけ。捕ってみたい気もするが、つかまえたなら傷つけたり、草花だったら元に戻せないからか。ラムサール条約、サンクチュアリ、保護区域であるから致し方ない。

水生動物を見せて説明してくれた講師の中に、とても若い男性がいた。その他の先生方や関係者は40代くらい～高齢だったのに、ひととき若い。水生動物の説明が上手く、子どもの扱いも上手い。褒め称えるついでに (てっきり社会人だと思ったため) どのようなお立場か訊ねたところ、せいぶつ部卒業生の現役高校生男子だった。このような人が次へ繋いでくれる人材なんだろうと感じ入った。子ども未来館を象徴するような成長を期待したい (写真7～9)。

●野鳥観察会のはずが…

東なぎさでの最後の学習は、足元ぬかるむ日光にキラキラ反射した泥の中を歩き (だからみんな長靴、ゴム靴を履いている)、干潟越しに野鳥を観察することであった。望遠鏡も用意されていて覗くと鳥の種類がわかる。目線高さの先に鳥を見つけることができるが、足元を見ると多数の穴が空いていて、サササーッと何かが隠れる。子どものだれかが「なんかいた～っ」と叫ぶ。生き物をつかまえることは御法度だということを忘れて隠れたり逃げたりするものの正体を突きとめようと、思わずしゃがんで穴をほじくろうとする。大人たちに咎められて渋々あきらめるも、大人や友達と生き物の正体の推察論をにぎやかに交わしていた (写真10～12)。

●最後に

東なぎさでの活動を終え集合写真を撮り帰りの船に乗船。正午ごろに集合した場所で解散となり、イベントは無事終了。

イベントに参加してみて、江戸川区子ども未来館のメンバーである子どもたちは、恵まれた環境で学んでいると思った。地元江戸川区民であるか否かにかかわらず、首都圏に東なぎさのような生き物の聖域をのぞける場所があることは宝である。人間がこれまでのような開発や生活を求め続けると、このような干潟・湿地はどんどんなくなっていくだろう。今回イベント参加した子どもたちが将来どのようにアクションを起こしていくのか楽しみである。イベントを主催した本部会主査の佐々木氏はじめ関係者の方々もきっと同じ思いだろう。お疲れさまでした。



左から 写真7/東なぎさに生息する水生植物を見て触って学ぶ
写真8/専門家の先生による説明を受ける 写真9/トビハゼ



左から 写真10/望遠鏡越しに沖の干潟に飛来している野鳥を見る
写真11/湿地に生き物の気配を察知し泥に指を突っ込む子ども 写真12/何を見つけたのかな？

日本デザイン学会第2支部および環境デザイン部会見学会 「URBAN FUNGUS 能作文徳+常山未央：都市菌（としきのこ） —複数種の網目としての建築」を観覧して

上綱久美子（design office kk 代表）

2024年 3月 7日（木）、TOTO GALLERY・MAで開催されたタイトルの建築展覧会を同ギャラリー館長の橋田氏による館長トークで観覧してきた。当展覧会の様子をレポートしつつ、私が理解した展覧会の趣旨と感想を述べる。

●URBAN FUNGUS（都市菌）の意味するところ

建築家の能作文徳+常山未央は夫妻であり、各々建築事務所を主宰しながら大学で教鞭もとり、共同で活動もしている。2人の建築家はこの展覧会に際して次のように言う。「～（前略）～ 私たちは建築を大きな網目の中で捉えている／建物は資源から廃棄までの一時的な結節点だ／都市ではゴミも材料になる／アスファルトを剥がせば、土壌が小さな生産地と分解地になる／太陽熱を使えば、調理が台所から飛び出す／建物を持ち上げれば、

そこが生き物の棲家となる／そうやって身の回りの資源、太陽、土、ゴミと生活が絡み合い複数種の居住域が築かれる／菌（きのこ）が腐敗と再生産の網目に生きるように」

そして、こうも言う。「私たちは建築を複数種の網目と捉えている。人間の生存を支える建築は、動植物や微生物を含めた複数の生物種やそれらを取り巻く事物との相互の絡まりあいの中にある。様々な生命と共存するためには、破壊的な強い力ではなく、生態系と微かに接触する程度の弱い力で建築をつくらなければならない。（中略）『アーバン・ワイルド・エコロジー』はエコロジーの語源である『オイコス（家の意味）』を起点に考える。（中略）自分達が住む場所からの実践である。私たちは学びや気付きの連続の中で建築を考えていく。（中略）人間と複数種が共存する居住域を築くために、菌（き

のこ）のような弱い力で現代都市を分解して再組織化する、それが私たちのヴィジョンである。」

以上から、私が理解したのは、2人は建築を都市の生態系の一部としてみている、ということ。私が言う生態系とはいわゆる生物学的な生態系の意味と人間社会において営まれる生活事象も含めた都市生活ならではの生態系という意味まで広げたものだが、どうだろうか（写真01）。

●ギャラ間館長によるギャラリーツアー

見学会当日17:00からギャラリー間の橋田館長によるギャラリーツアーで観覧が始まった。10数名ほどの参加者は学生が多かった（写真02）。

本展示の目玉プロジェクト「西大井のあな」は、能作と常山の自宅兼仕事場である。ギャラリー間の約半分がこの作品の展示に使われている。「西大井のあな」



写真01 はじめにパネル



写真02 館長トーク



写真03 西大井のあな模型



写真04 西大井のあな図面

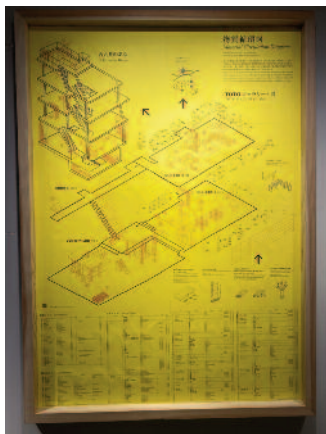


写真05 物質循環図



写真06 2階展示の様子



写真07 明野の高床模型

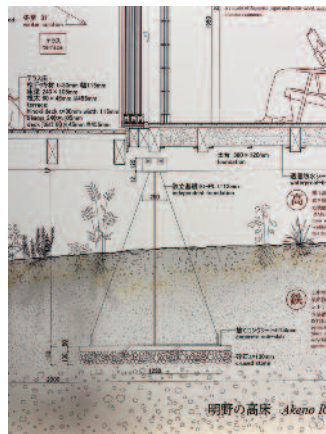


写真08 明野の高床図面

は築30年の鉄骨4階建ての建物で、二人が住みながら改修している。上下階に光を届け、空気を循環させ、気配を伝える環境装置である「あな」を開けている。プロジェクト名はその「あな」のこのようだ。その「あな」には既存の住宅産業に「かざあな」を開けんとする二人の気持ちが込められているという（写真03、04）。展示解説では、一般的に言うところのリフォームまたはリノベーション、そして「完成」という言葉は使われない。代わりに「分解」「再生産」「循環」という表現がされている。展示の写真はどれも工事中のような未完成状態のものが多かった。写真に記録されたプロセスには理由や意味があり、人が生活する場所は常に同じ状態ではない、とも捉えられる。橋田館長は、「西大井のあな」を見学をしていて、このプロジェクト中に能作と常山に子どもが誕生し、その子どもと「あ

な」の開いた建物に住んでいる。さすがに転落しないように「あな」にネットがはりめぐらされたという。

このプロジェクト展示を見ると、二人は建築をモノと考えていなくて、常に人間が手を加えて都度条件に合うように整える装置か生き物と考えているように思える。中でも感心したのは、このプロジェクトの基本方針である「物質循環」の考えである（写真05）。「西新井のあな」の建材や備品の材料がどこから来てどこへ行くのか、「西新井のあな」に関わる全ての物質の循環がわかるようになっている。

2階の会場では、二人の他のプロジェクトが所狭しと展示されていた（写真06）。「都市菌」の考え方においてビジュアル的にも印象的かつわかりやすかったのが、「明野の高床」と「杭とトンガリ」であった。どちらの建物も、建物と土の関係を

切り離してしまわないように（人工的なもので土の占有を侵さないように）するために考案された基礎がとても特徴的である。特に「杭とトンガリ」は、東京都渋谷でこの杭の深さって有り!?なのだ。高密度の都市環境では土の下にもいろいろ埋まってそうでなのだが（写真07-10）。

●観覧のまとめ

この展覧会は「建築物」を対象としているが、私が知っている従来の建築の展覧会とは異なる印象をおぼえた。土から上の建築の形状や配置が観る側に印象を与えるのではなく、土の周りや土の中、あるいは建築に使用する建材や材料の循環を重視しているようなので、日本伝統木造建築（民家）を観るときの印象に近い。都市菌、まさしく頑丈な根を持たないキノコに近い建築かもしれない。不思議な印象なのである。

ギャラリー間の展覧会は、毎回さまざまな建築家とその作品を紹介しているが、現在の建築スタイルや哲学の傾向や潮流が感じられる。「環境デザイン」の言葉を使っていなくても、建築と周辺環境や人の営みとの関係においてさまざまな試みがされているのを観て、現在の建築と環境デザインは切り離せないものだと考えさせられる。



写真09 杭とトンガリ模型



写真10 杭とトンガリ図面

藤本英子先生退官イベント 「Reincarnation」に参加して 上綱久美子 (design office kk 代表)



図1 イベントフライヤー（表面と裏面）

2024年3月24日（日）に30日（土）までの1週間行われた京都市立芸術大学の藤本英子先生の退官イベント「Reincarnation」が封切られた。初日の24日だけの参加だったが、その模様についてお伝えする。

「Reincarnation」は、『デザインから地域を変える』をテーマとしたシンポジウムを皮切りに、プレイフルイベントとして藤本先生と遊ぶ5日間が催された。初日に続き、『水都の日』、『行政まちづくりの日』、『画壇対談の日』、『地域まちづくりの日』、そして最後に『宇宙の日』。多彩

なテーマで多様な専門の方をゲストに呼ぶ、とても楽しそうな退官イベントで、藤本先生の多彩な活動とお人柄とネットワークが表れているように思えた（図1）。

24日の午前は、藤本先生の3名の教え子から、学生の頃のエピソードや現在の立ち位置、自身が関わったプロジェクトや作品の紹介などスライドによる講演があった。京都市前市長も来場し、藤本先生への祝辞コメントも添えられた（写真1, 2）。午後は、『デザインから地域を変える』のテーマで、川崎雅史氏（京都大学地球環境学堂 教授）、泉英明氏（有限会社ハートビートプラン代表取締役）、村田智明（株式会社ハーズ実験デザイン研究所代表取締役）の三氏のスライド講演と藤本先生が自らコーディネーターとなったディスカッションが行われた（写真3）。

同時に、別会場で藤本先生の活動成果展示があり、多くのご活動に携わっておられる様子がよくわかるものとなっていた。その中に2017（平成28）年9月に行われた「これからの仕組み・持続可能な環境デザイン “京都の町家・団地再生から考える”」の環境デザイン部会見学会と記念写真が掲載されていた。私（上綱）

も当見学会に参加したが、京都市「平成の京町家」や堀川団地の再生、京町家の活用事例として幾つかの町家を見学して、京都のまちの別の顔（試み）を感じられると同時に、今振り返ると現在国内の各都市におけるまちづくりや地域再生はあの時の見学会の内容を踏襲しているように思える見学会内容であった。藤本先生のご活動の一片に、あの見学会を取り上げていただけていることになんとか嬉しく思った（写真4-5）。*見学会の内容はEDplace 78号に詳細が記載されているので、ぜひご参照願いたい。

初日のイベントの締めくくりは、2023年10月に新設した大学敷地内のカフェテリア内で懇親会。当日の午前午後イベント同様、この懇親会でも藤本先生自らマイクを握り司会進行役をされていた。立食式であったが、お知り合いの市内料理屋のデリバリーの料理のビジュアルとディスプレイが素晴らしく、またお知り合いの音楽家の演奏と歌も披露され、アットホームで藤本先生らしい素敵なパーティであったと思う（写真6-8）。

23年にわたる京都市立芸術大学でのご教鞭に心より敬意を表します。



上段左から 写真1／午前の会場の様子 写真2／前京都市長からコメントいただく 写真3／午後の会場の様子 写真4／活動成果展示の様子
下段左から 写真5／活動パネルで2017年度本部会見学会の写真掲載（右下集合写真） 写真6／懇親会場の見て食べて楽しめる料理
写真7／藤本先生自らマイクを握り会進行 写真8／演奏会の様子

報告「長谷高史デザインの系譜セレクト展」

上綱久美子 (design office kk 代表)



レセプションでお話する長谷高史先生

長谷先生は、環境デザイン部会名誉部会員（ホナリーフェロー）ならびに2025年秋に開催予定のEDplace100号記念企画展覧会の運営メンバーとしてもご尽力いただいています。少し前になりますが、2023年11月3日～12日に長谷先生ご自身の作品セレクト展が開催されたことに心よりお慶びを申し上げますとともに、その展覧会の内容をここに少しですが、記したいと思います。

去る2023年11月上旬、東京の表参道駅にほど近い荒川技研工業株式会社本社・表参道ショールームのビルの中にある「TIERS GALLERY（ティアーズギャラリー）」で同展覧会は行われました。主催は

荒川技研工業株式会社で、長谷先生の代表作の一つに同会社の「ワイヤーグリッパーデザイン」があります（写真1）。

環境プロダクトデザイナーとして、1970年から2023年までの53年間の作品の中からセレクトした作品を展示した展覧会で、『人、モノ、場、空間、コト、時の快適で美しく心地よい関係づくりを求めて』デザインをされている長谷先生の代表作が一覧できるものでした（写真2-5）。

筆者も観覧しましたが、TIERS GALLERYの洗練された建築デザインと空間に所狭しと展示された作品の数々。こんなにも多くの社会的意義のあるご提

案をされてきたことに敬意を表するとともに、プロダクトデザインを基軸にした環境デザイン解の例を具体的に拝見できたことはとても有意義でした。長谷先生が中心となって制作された「環境デザインの系譜」も販売されており、EDplace100号記念企画の展覧会に向けて、身が引き締まる気持ちとともに、長谷先生のご提案されてきた環境デザインの流れを次代へうまくつなげていければ良いな、と考えさせられた次第です。

写真1-5および文中一部はTIERS GALLERY 公式サイトより引用

<https://www.arakawagrip.co.jp/tiersgallery/archive>



写真1 ワイヤーグリッパー



写真2 大阪万博1970 エクスポタワーカプセル照明デザイン



写真3 ハツ場ダム 長野原大橋「めがね橋」デザイン



写真4 都営バスデザイン



写真5 JR24時間時計



ギャラリー外観

臨時総会・幹事会報告

主査 佐々木美貴

1. 臨時総会報告

3月11日（月）19時～ オンライン

出席：佐々木、森山、平松、小泉、上綱、川合、加藤、水津、菅原、伏見、藤本、原田、橋田、池田、清水、杉下、長谷、山野、山田

総会には、19名の出席と委任状12名合わせて31名、会員数45名の半数以上で臨時総会の予算のご承認を頂きました。

【議事1】（2025年度予算案件）

EDプレイス100号記念の企画展の開催の検討

【議事2】（2024年度予算案件）

EDプレイスのアーカイブ化予算（162万円）の承認

（2024年4月の契約のため臨時総会にて承認が必要）

要旨

2023年7月9日に行われましたED部会総会で、創設時からつづくED placeの100号に向けて企画を継続して検討する。との提案が承認され、アーカイブ化には水津氏を中心とした企画委員担当。100号記念は上綱氏を中心とした会報委員担当が担い、ワーキングチームへ主査、副主査、事務局の参加と部会員への募集で長谷氏、中嶋氏の参加を得ました。作業を毎月の幹事会で6ヶ月にわたり検討をし、この度、ED placeのアーカイブ化と100号記念号と展覧会の開催の詳細をご提案しました。

臨時総会資料

① ED place100号企画内容

ED placeは、環境デザイン研究部会の

機関誌として1985年に第1号が発刊され40年近く経過し、100号発行を機にこれまでの環境デザイン部会の歩みを見返し、改めて「環境デザイン」について部会員間で見直してはどうかという企画をED place 会報委員間で発案いたしました。

また、ED place 100号発行記念企画として、展覧会の開催を考えております。（担当、上綱）

・ED placeでの展覧会で環境デザイン部会が歩んできた足跡を見つめ、環境デザインの未来や次世代へ繋いでゆく手立てを語る。

・展覧会の目玉は、ED place1～99号までの歩みを総覧できる年表（年譜）とED place1～99号からのテキストマイニングの展示。

・アーカイブ閲覧デモおよびED place1～99号の製本と閲覧、歴代主査および現部会員が年表・年譜とテキストマイニングを共有。

・各活動や研究と照らし合わせて客観的に環境デザイン部会の活動や環境デザインを語るビデオレター展示

・開催場所は長谷氏の関係する表参道の画廊（画廊借り費用は無料）展覧会予算（約60-70万円）

・ED place100号の内容については引き続き、展覧会と並行して検討していく。

② ED placeのアーカイブ化

1) 我国の環境デザイン史を考察する上で一次資料としての価値があるという視点から広く公開されるべき、2) 研究資料を活用する研究者の利便性の視点から紙面記録よりデジタルアーカイブ化が望ま



臨時総会出席者写真

しい、3) 今後のED placeをアーカイブに投稿することで継続的管理と利用が担保されやすい、と考え、企画を推進してきました。予算は、標準的な検索機能、紙原稿や古いOS上で制作されたデータ復旧、運用後に部会メンバーが管理可能な仕様にするためのシステム構築、専用サーバーのレンタル費などを含め、コスト算出しました。お認めいただければ1年後の公開を予定しています。(担当、水津)

1 デジタルアーカイブ整備費用

1,627,010円

2 整備スケジュール

1月～3月末 アーカイブの仕様に関する打ち合わせ、調整

1月～5月 20号以降のデータをpdfに変換する作業は部会で行う

4月契約後～5月半 1～19号(紙原稿)のスキャン+OCR処理、pdf変換

6月～8月半 システム開発

8月半～10月半 テスト運用 記事内容確認(部会)

10月半～11月半 マスキング作業、システム修正

2025年1月 デザイン学会内公開、(1年後に一般公開を想定)

3 アーカイブシステム概要説明

デザインは調整可能

4 参考URL

「瀬戸市文化遺産・観光写真検索システム」

<https://photo.seto-guide.jp/>

「瑞浪市陶磁資料館」

<http://toujiki.city.mizunami.gifu.jp/>

※ED place100号発行記念・アーカイブ・展覧会 経費

・展覧会予算(約60-70万円A)

・アーカイブ予算(約162万円B)

※現在のED部会の貯金(郵便局残金)は232万円です。これにより、残高はほぼ0円になります。

2. ED部会からJSSD理事会に選任された方々

第2地区理事 支部長:伏見清香

全国区理事 1.池田岳史 2.伊藤孝紀

3.小泉雅子 4.水津功 5.森山貴之

監事 曾我部春香

3. ED部会 幹事会報告

5月13日(月) オンライン19時～20時半

参加者:佐々木・水津・上綱・小泉・川合・山内・森山・伏見・原田・土田・平松・菅原・加藤・藤本・池田

(1) JSSD春季大会 九州産業大で、ED 部会の会議の部屋を申請中

6月21日(金) 16:30～18:00 6月22日(土) 11:00～16:00

上記の2つの時間帯に、「非公開」でED place100号記念について話し合う予定。

(2) ED部会総会予定

・8月31日(土) 13:00-17:00

・横浜美術大学 本館2F 会議室2A・収容人数:20名程度・可動式モニターで遠隔対応可能・対面とオンラインで開催予定。

(3) ED place100号記念

・アーカイブ・展覧会・100号記念号の3つを同時進行で検討しながら進んでいる。

① ED place のアーカイブ

3月11日の臨時総会のアーカイブ化への出金承認を受け、業者と4月に契約を交わし、現在作業中。12月に作業完了。その後試験運用の後公開。

●総目次について(経過・進捗・検討内容)

・アーカイブ作業の方で現費用内での総目次作成はできる。ただまだ素材を提示していないので早い段階では出てこない(水津)

・年表班では、年表素材としてED place総目次(執筆タイトル、執筆者)は早めに必要だと考えて作業を進めている。アーカイブの方でも総目次作成できる段階になったら、年表班の方のそれと照合すれば良い、アーカイブ作成の総目次のチェックも兼ねられる(上綱)

・テキストマイニングの材料にはED place PDF データで良いが、総目次があるとなお良い(川合)

・総目次と合わせて、展覧会で使用の年

表を製作中。年表班(上綱・小泉・伏見・佐々木)

②展覧会

展示期間について

・2025年11月1日(土)～9日(日)でティアーズギャラリーに伝えている(長谷)ただし、デザイナートOKYOが10月末～11月3日で開催される予定なので、その期間はできない。まだ開催期間が未定のため、一応上記期間で承っておく、とのこと。

●経過・進捗・検討内容

・ティアーズギャラリーに協賛(共催)のお願いをしているが、具体的には未定(長谷)

・搬入と設営が一日では不安なので二日ほしい(森山)

・協賛を募るために、A4一枚に趣旨をまとめてほしい(水津)→今年のED 部会総会までに作成し、部会員に配布配信できるようにする。

・ティアーズギャラリーは明るめなため、(年表などを)プロジェクター投影で見せることは難しいのではないかと(森山)

・今年7～10月に年表と(展示で見せる)時代構成とマケットの精査・選定などとインタビュー収録は同時並行で進めたい(動画編集に時間を要するため)。インタビューの共通質問を用意するなど動画収録と編集の効率性を考えるなど。早めにとりかかりたい(森山)

・展示で使用するキャプションや印刷物などは横浜美術大学で内製予定だが、年表やインタビュー動画に関するもの、マケットクレジットなど多々あるので内容的に関わるものは前倒しで作成したい(森山)

・広報も、今年の秋季大会でEDplace アーカイブ告知、来年春季大会でEDplace 100号企画展覧会のフライヤーなど、その他SNSやイベント情報サイトでの掲載など行って来場者を募る(森山)

・Peatix(ピーティックス)はイベント情報でよく使われている(水津)

・斜めの壁にプロジェクター投影が難しいなら、弱粘着のユポ紙のようなものを使うのはどうか(小泉)

・弱粘着シートは気泡を入れないで貼るのが大変、剥がす時に壁面の塗装も剥がれる危険性もあるが検討してみたい（森山）

・展示スケジュールをきめ細かく決めている。ティアーズギャラリーが明るいからプロジェクター投影が難しいのではとのことだが、展覧会は昼と夜で企画を変えたらどうか？例えば、夜はギャラリートークでプロジェクター投影するなど。ギャラリートークを毎晩やっても良い。

17:00-19:00 とか（11月上旬の日入りは16:40前後）、ティアーズギャラリーのギャラリートークは盛り上がっている（長谷）

・運営要員が必要、トークテーマや資料用意なども（森山）

・あえてギャラリートークのために資料を作らなくても良いようにしたら良い（長谷）

・本企画メンバーがメイキングオブ〜、年表やテキストマイニングなど作業した中での気づきなどに基き招聘ゲストに質問するなど（上綱）

・以前プロジェクションをした際に、エプソンに高輝度プロジェクターを借りた事例がある。

・レンズによって近距離でも投影できる（20,000ルーメン）。協賛でエプソンなどにあたって機材借りることも可能性あり（水津）

・インタビュー動画は、時系列でインタビューし、前の人の話を聞いて次の人が語る、みたいな流れ、ドキュメンタリーっぽくしたらどうかと考えている（森山）

・内向きな展覧会になりがちなので、初めての人でも理解できる展示とすることを考えた方が良い。ED placeとは何？環境デザインとは？（部会や学会）内部の人向けの文字が多い展示ではなく読み切り型にする、入口バナーや展示内時代ごとのキャッチコピーなど、一般の人にも興味持ってもらえるような見せ方をする。表参道は若者が多いので若者ターゲットも視野に入れつつ（加藤）

・エントランスから階段のところでは、ED部会やED placeの沿革紹介パネルを考えている。展示会タイトルは一般の人も

興味そそのものにしたい（森山）

③EDplace100号構成案について

●経過・進捗・検討内容

・過去のことに偏りがちだが、未来について述べるものもあった方が良い（水津）

・未来（ED place、環境デザイン部会、環境デザインの今後）について、企画メンバー全員で座談会的にまとめたものを巻頭言にするのはどうか（長谷）

・100号祝辞の候補、向井先生、水野先生はインタビューをご辞退されているので、初期に活動してくださった吉田慎吾先生、黒川威人先生がよい（長谷）

(4) 規約について

長谷先生、渡辺有子さんに伺いましたところ、ED部会に規約のようなものがないことがわかりました。その後、ED place 9号に記載がありましたが、現在のED部会運営にそぐわない形のため、幹事会で、規約について検討します。

(5) 総会資料の作成

2024年度総会資料の内容を確認の上、担当箇所の記入2024年度各ご担当についても、ご承認いただければ、その旨をお伝えください。

佐々木の独断で、仮に記載しています。（川合さん、伏見さんご希望）次の幹事会で来年度の体制を決定しようと思います。

幹事の交代 ホームページ担当を加藤さんから川合さんへ。事務局 平松さんから交代の意向が示され、適任者の選定を行う。

4. 幹事会 6月10日（月）19時から

・2024年度 新体制の検討

・100号記念展覧会 年表の作成担当から

・アーカイブ報告 総目次の作成について 6月末に佐々木・小泉にて1～19総目次案を作成、アーカイブ業者に提出

・規約について 改編が必要のため 要検討 →事務局（平松さん）から総会に向けて、叩き台の提出があります。

・事務局の交代について、森山さんから提案があり、総会までに検討

5. ED部会ミーティング

（春季大会時 リアル+オンライン）

6月22日（金）16時～17時

23日（土）11時～14時

参加：加藤、佐々木、森山、原田、伏見、小泉、上綱、山本、川合、池田

・100号年表班からの分析途中報告 佐々木・小泉・伏見・上綱

・100号記念展覧会 意見交換

・アーカイブのスケジュール確認

6. 2024年度 ED部会総会予定

リアル+オンライン

・8月31日（土）15:00-17:00

・横浜美術大学 本館3F-33教室・収容人数：20名程度・対面とオンラインで開催予定。

横浜美術大学 HP

<https://www.yokohama-art.ac.jp>

JSSD ED部会 2024総会

時刻: 2024年8月31日 03:00 PM 大阪、札幌、東京

参加Zoom ミーティング

<https://zoom.us/j/95774211308?pwd=i4Pqe9IMLS5UctuU6kJVny7tvk0bnV.1>

ミーティング ID: 957 7421 1308

パスワード: 192198

総会後に青葉台駅近くで、懇親会を予定しております。総会のお知らせメールを配信時に懇親会の出欠も取りましますので、対応をよろしくお願いいたします。

皆様日時のお取置き、並びに、ご参加をお願いいたします。

EDplace